

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：33704

研究種目：基盤研究（C）（一般）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520207

研究課題名（和文） 地芝居残存台本調査による歌舞伎作品変遷史研究

研究課題名（英文） Study of History of Kabuki pieces through existent scripts for Jishibai (Rural Kabuki)

研究代表者

安田 徳子 (YASUDA NORIKO)

岐阜聖徳学園大学・教育学部・教授

研究者番号：00135279

研究成果の概要（和文）：各地の地芝居に伝承された古台本はそれぞれの歴史と特徴をよく伝えているので、本研究では、出羽・赤城山麓・伊那谷・東濃・三河・小豆島の地芝居を対象として古台本の調査を行い、ほとんどの地芝居が江戸時代後期から明治初期までに上方系の旅役者によって伝えられたこと、その後も旅役者が地芝居に濃密に関わってきたことが明らかとなった。江戸系の台本も多少はあるが、明治以降の流入である。地芝居は義太夫芝居の奉納が根底で、浄瑠璃本を台本として伝える地域も多い。

研究成果の概要（英文）：Old scripts for Jishibai (Rural Kabuki) reveal their histories and characteristics, and this research studies old scripts found in Dewa, Akagi, Inadani, Tounou, Mikawa, and Shodo island. Through this study it has been revealed that almost all Jishibai are introduced by travelling actors in the Kyoto and Osaka area in the later period of the Edo era to the beginning of the Meiji era. There are some scripts based on Edo area, but they are introduced in the Meiji era later. Jishibai are basically presentation of Gidayu Kabuki to the deities, and the scripts of Joruri are used as the scripts for Kabuki on many areas.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：歌舞伎・地芝居・旅芝居・小芝居・歌舞伎台本・歌舞伎台帳・浄瑠璃本

1. 研究開始当初の背景

近年、地芝居関係者の元に、地芝居・旅芝居の古台本が纏まって残っていることが分かってきたが、これらの台本は放置されて痛みも激しく、消滅の危機に瀕している。これらは地方の芸能活動を伝える貴重な資料である。また、この中には地芝居独自の作品や、

大歌舞伎作品として創作され上演されていたが、現在は残っていないものなど、歌舞伎研究においても無視できない作品の台本も多い。これら全国各地の地芝居団体の持つ古台本を調査し、写真複写によって収集し、整理検討することは、地芝居研究のみでなく、中央の歌舞伎研究にとっても資するところ

は大きいと思われた。

2. 研究の目的

歌舞伎は京において創始された都市の芸能で、都市の民衆の圧倒的な支持を得て、三都の大芝居(大歌舞伎)を中心に発達、我が国を代表する演劇となった。一方で、発生からそれほど時を得ずして地方に伝播したが、田舎では歌舞伎は原則として禁止であったこと、また、人も少ないので興行としてはほとんど成り立たないこともあり、大方は、神仏への奉納芸として祭礼の芸能として上演された。さらに、都市から遠く隔たっており、訪れる大歌舞伎の旅興行や旅芝居一座も稀にしか訪れないので、僅かに機会を捉えて、役者から歌舞伎を習い、村人が自ら演じる地芝居が発達した。地芝居は素人の演じる奉納芸であったから、都市の歌舞伎とは異なる独自の形になっていった。地芝居に残る残存台本はこうした地芝居の特徴をしっかりと残しているはずである。

(1)地芝居で上演される演目の大方は大歌舞伎作品だが、地方に合わせて改作が施されたり、演出が変化したりしている。また、地芝居団体の所蔵する台本類には、義太夫浄瑠璃本が多数含まれていて、これが地芝居では台本として使用されていたり、台本の形態にも地芝居独自のものがある。各地の地芝居古台本と大歌舞伎台本、旅役者所持台本の内容や形態を比較して、地芝居作品の特徴を明らかにし、その変遷史を辿る。

(2)大歌舞伎にはなく、地芝居のみで上演されている作品は、その地に纏わる独自の創作作品もあるが、かつて三都の大芝居や小芝居で上演されていたものを、旅芝居が持ち運び、各地に伝えたものであることが多い。旅芝居役者所持台本との比較や、大歌舞伎台本の調査によって、原作を見つけ出し、伝播の経緯を探り、地芝居と大歌舞伎、旅芝居との関係を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)地芝居に残存する古台本は、江戸後期から明治・大正・昭和初期までのものであるが、これらは墨書による写本で、現在では読めなくなっており、使用不能で放置され、破損も激しいものも多いので、できるだけ写真複写によって収集する。古台本の存在は全国各地に確認できるが、個人研究では、収集力に限界があるので、調査・収集対象を絞って行った。

(2)旅芝居役者所蔵台本は、子孫がそのまま保管している場合、資料館などに寄贈されている場合などがあるが、これも調査は進んでいないので、地芝居の古台本同様に、できるだけ写真複写によって収集する。

(3)古台本群の内容を分析し、それぞれの台

本群の特徴を絞り出す。この時、現行の地芝居の使用台本及び上演映像をも参考に用い、古台本と現行上演の相違を確認する。そのために、地芝居上演をDVDに収録する。

(4)地芝居、旅芝居、大歌舞伎に共通する作品を取り上げて、各台本を比較、検討する。そのために、大歌舞伎作品の台帳・台本を調査する。

4. 研究成果

(1)平成初年頃から全国の地芝居調査を行ってきた。「地芝居の上演狂言に関する研究—東濃・南信・三河地区を中心に—」の研究題目で平成13・14・15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))の給付を受けて、東濃・南信・三河地域の地芝居台本の調査を行った。加えて、平成22・23年度に文化庁の助成を受けて、社団法人全日本郷土芸能協会が行った「全国の地芝居・農村舞台の調査と活性化事業」に、報告書作成委員として参加し、地芝居の現状と問題点を確認した。これらを本研究の予備調査と位置付けて、資料を分析すると、地芝居団体は次のように分類できる。

(A)江戸時代以来、途切れることなく地芝居を続けてきた団体。ここでは、台本類・鬘衣裳・道具から上演舞台まで所有し、演出も浄瑠璃も団体内で充足されていて、江戸時代或いは明治・大正以来の古い演目と演出を継承していることが多い。

(B)地芝居衰退期に一旦は途切れたが、再開し現在まで続けている団体。振付師匠と浄瑠璃を内外で依頼し、衣裳も、時には道具も借りて、地芝居上演をしている団体が多い。再開時に古態を復活したか、新たな形で再出発したかなどによって、古台本類や資料・鬘衣裳・道具などが保存・保管されている場合と、喪失してしまっている場合とがある。

(C)近年の地芝居再興期に愛好者が集まって新たに始めた団体、に分けられる。ここは伝統を持たないので、古い資料は存在しない。

これを踏まえて、調査・収集済みのものは、その資料を参考とすることとし、今回は以下の地域と団体や資料館所蔵の台本類を調査対象とし、各地域の特性と変遷を明らかにした。

東北の日本海側地域の山五十川歌舞伎(山形県鶴岡市)、関東北部の赤城古典芸能部(群馬県渋川市)、伊那地域の下條歌舞伎(長野県下伊那郡下條村)、三遠南信の横尾歌舞伎(静岡県浜松市)・小原歌舞伎(愛知県豊田市)・藤岡歌舞伎(愛知県藤岡市)、小豆島の中山歌舞伎(香川県小豆郡小豆島町)・肥土山歌舞伎(香川県小豆郡土庄町)の所蔵台本類、豊田市郷土資料館(愛知県豊田市)、小原郷土館(愛知県豊田市)、各務原市歴史民俗資料館(岐阜県各務原市)、中山道歴史資料館(岐阜県中津川市)の所蔵台本類。

その結果、地芝居の古台本類は、現在の上演地芝居と作品も演出も同じ内容の台本、現行作品とは全く異なる作品の台本、大歌舞伎台帳の写し、中小芝居や旅芝居の台本またはその写し、義太夫の丸本や稽古本あるいは床本、稀には講談本など多彩で、その所有のあり方は地芝居団体によって異なる。地芝居は街道や航路によって伝播し、地域の特性(土地の豊かさ、為政者の厳しさなど)によって独自の発達をした。それが作品の内容のみならず、台本の形態にも反映し、多彩な台本類として残っているのである。

調査した台本は、所蔵別にデータベース化し、私家版の報告書に目録の形で掲載した。

(2) 現在知られる地芝居の記録で、もっとも古いものは、栃木県那須烏山市の八雲神社(午頭天王)祭礼の『赤坂町(現泉町)祭礼記録』と岐阜県下呂市上呂の久津八幡宮の宝永3年(1706)～正徳5年(1715)の『久津八幡宮祭礼日記』で、これを見ると、獅子舞や神楽、或いは風流踊りなどが歌舞伎に変わっていったもので、単に江戸や上方の歌舞伎を真似たものではなく、悪霊(鬼)退散の願いを込めた奉納芸として祭に相応しい新作狂言が仕組まれていたことがわかる。台本は残っていないが、この時、浄瑠璃が重要な役割を担っていたらしい。

愛知県豊田市の足助八幡社祭礼の足助新町『祭礼記録帳』(焼失)から宝暦12年(1762)～明治5年(1872)の「演題」と「師匠」を抜粋した記録(「足助八幡社祭礼奉納 山車狂言について」『足助の山車』所収 1995, 3)、及び岐阜県不破郡垂井町の八重垣神社(牛頭天王社)の安永4年(1775)～寛政3年(1791)の祭礼記録『不破郡垂井村祭礼諸職仕上帳』、同じく垂井町表佐の安永5年から嘉永7年(1854)の村の姫之宮(比女神社)祭礼記録『不破郡表佐村祭礼神事記』によれば、奉納した狂言は創作ではなく、ほとんどが義太夫狂言であったことがわかる。足助や垂井村の記録から「振付」「太夫」を頼んで上演していたことが知られ、浄瑠璃のままか、それに非常に近いものであったと思われる。

奉納芸であった地芝居では、浄瑠璃で語られる芝居が重要であった。

(3) 地芝居の台本は、調査した限りでは愛知県豊田市足助地区の旧下国谷村で、寛政3年(1791)8月17日の祭礼に使用された台本『風俗娘恋非鹿子 鈴森別の泪』が最も古い。これは宮古路浄瑠璃によるもので、上方の大芝居台本を写したものであるが、義太夫浄瑠璃で語られたようである。旧下国谷村の台本群には、これ以降明治20年代までの村祭で使用された台本が残っているが、ほとんど義太夫狂言で、村若連所有の本台本と個人所有の

役別の台詞抜書である。この台本を義太夫本及び大芝居の歌舞伎台本と比較すると、歌舞伎台本より義太夫本に近く、ト書きがないことが特徴である。即ち、義太夫本から地芝居用に作った台本であることを窺わせる。

現行の地芝居台本をみると、義太夫本をそのまま使って、これを竹本(語り)と台詞に分けたのみという台本がしばしばある。また、赤城古典芸能部や下條歌舞伎小池恒久氏の所蔵本は義太夫本(丸本・稽古本)ばかりで、歌舞伎台本は僅かしか含まれていない。その他の古台本群にも相当量の義太夫本が含まれている。現行でも、上演時にこれらから浄瑠璃部分と台詞に分けた台本を作成している所もある。

また、「絵本太功記」十段目のように、現在も大歌舞伎の人気作品で、歌舞伎独自の局面を持つような作品では、地芝居でも歌舞伎台本が取り入れられているが、浄瑠璃の詞章が各所に取り込まれて、地芝居独自の台本になっている。地芝居にとって義太夫は必然の存在で、これに基づく演出が行われていたのである。

(4) 山形県鶴岡市の山五十川地区で継承されている地芝居は、氏神である河内神社の春祭典(5月3日)に、御輿渡御、獅子舞奉納の後、「山戸能」「恋慕の舞」「山五十川歌舞伎」という異質な芸能を奉納するという得意な形態で行われている。おそらく、獅子舞がもっとも古い奉納芸で、他の芸能は順次に添加されて、歌舞伎は文政初年頃(現存最古の台本は文政5年(1822)1月)には加わっていたのであろう。旧実俣村(川下)は能、旧蕨野村(川上)は歌舞伎を主に、さらに役者方・囃子方・裏方の家に別れて伝承してきた。伝承する歌舞伎演目は14狂言37場面、安政年間に市川大三郎、明治20年代から大正期に喜の字屋雀蔵、坂東花山という上方系の旅役者が、台本を伝え指導したものという。ほとんどが義太夫狂言だが、上方歌舞伎の台帳を書写したものと浄瑠璃と台詞を記したト書きのない台本で、義太夫本はない。専門の指導者がいなくなって以降は、この台本群は役者方の家に伝承され、囃子方、裏方もこれに基づいて、一丸となって伝承してきた。この有り様は酒田市の黒森歌舞伎と同じであり、北前船が運んできた上方の文化を、祭礼の奉納芸に組み込んで、村中で年に1度の都市の香りを楽しんだ出羽地域独特の地芝居伝承のあり方だった地芝居と言えよう。

(5) 香川県小豆島ではかつては至る所で地芝居が行われていた。現在残っているのは、土庄町の肥土山歌舞伎と小豆島町の中山歌舞伎のみだが、台本類、鬘衣裳、道具類を伝承し、氏神境内の専用舞台上、祭礼に奉納芝居

を上演している。肥土山に寛政5年(1793)6月中旬に造ったと墨書のある衣裳箱があり、これ以前から地芝居が行われていたと考えられるが、安政3年(1856)7月、上方役者坂東いろはが肥土山に、その弟の初代嵐璃当が安田に居住し、振付師として島内の地芝居を指導し、安田の炭山亀次が嵐璃当の二代目を継ぎ、息子の嵐璃孝とともに、小豆島全島の地芝居を隆盛に導いた。

しかし、肥土山の台本の半数以上が浅田屋浅尾与作(梅升、梅昇)旧蔵本である。この人のことは全くわからないが、旧蔵台本を検討すると初代浅尾与六の弟子の小芝居役者か旅役者らしい。この人の所蔵台本を肥土山歌舞伎の指導者(嵐璃当か)が纏めて譲り受けたのではないか。肥土山には、これも纏めて入手したらしい義太夫稽古本も150本ほどある。肥土山の指導者は、これらを使って台本を作り、地芝居を指導していたのではないか。

中山歌舞伎も文政2年(1819)の墨書を持つ鬘箱があり、この頃には歌舞伎が行われていたと思われるが、伝承されている台本・床本は、島内草壁村(現在、小豆島町)に住み着いて、明治43年からここの地芝居を指導した実川里若(市川島十郎)が書写したものが全体の3分の2を占める。ほとんどが上方の歌舞伎台帳の写しで、島十郎が指導した地芝居が今も伝承されている。また、交流のあった5代目中村歌右衛門が大正2年(1913)に歌舞伎座で初演した「小豆島」の台本が伝承され、演じられている。

(6)長野県伊那谷の下川路村(現飯田市川路)は、村の有力者が氏神境内に舞台を造り、3代目尾上菊五郎や7代目市川団十郎を招致して興行させたことで知られるが、この時、7代目団十郎が残していった台本も含めて大量の台本類を所持し、近郷の村々に貸出をしていたという。この下川路村の若連が所有していた上方芝居の歌舞伎台帳6種9冊を調査したところ、下川路村ではこの台帳を使って地芝居をおこなっていたらしいこと、また、この台帳は近郷の新野や中津川から入手したものであることがわかり、この地域では大歌舞伎台帳を使った地芝居が行われていたことが知られた。

下川路村の隣村親田村(現下條村親田)でも、庄屋であった古田鷹麿(1798~1872)がやはり舞台を造り、絵師で筆も立ったので自ら「婦士鏡湖水浮船」という創作台本を作り、名古屋から役者や浄瑠璃太夫を呼んで、村の若者を指導してそれを演じさせた(『下條村誌』)。平成23年村の旧家から「木曾棧旭軍記」の台本と天保9年3月上演時の「花覚帳」と番付の版木が見つかった。これも新作の芝居だったらしいが、上演時には、都市の芝居のように番付が配られ、近郷の村から花を持

って見物にきたことが知られる。さらに「金門五三桐」の初演台帳の写本と色刷り番付の版木4枚も見つかった。これも「木曾棧旭軍記」と同じ頃に上演された物らしいが、山間の村の芝居上演に、版木4枚裏表に彫られた8図を重ね刷りした美しい辻番付(パソコン上で版木のデジタル画像を処理合成してみた)まで作っていたということは驚くべき事である。

さらに、北隣の山本村(現飯田市山本)では、地芝居の資料は見つからないが、浄玄寺に安政4年5月29日興行中に亡くなったという3代目尾上松助の墓があるなど、しばしば大歌舞伎役者の旅興行が訪れていたことが知られる。

この天竜川右岸地域は、肥沃な東南斜面に位置する上、上記の村々は尾張藩支藩高須藩の領地で、年貢の取り立ても取締もなかったもので、豊かであったという。また東西交通の要所であって、江戸や名古屋との関わりが深く、都市の文化への関心が高かった。天保末年頃は飢饉や天保の改革で各地が疲弊していた時期だが、この地域はその影響は全くなく、江戸や上方の役者の旅巡業を招致して都市の芝居を楽しみ、地芝居も都市の芝居興行の如く華やかに行っていたのである。

(7)幕末頃から、旅芝居が盛んになった。都市の中小芝居は勿論大芝居の役者たちも、しばしば旅巡業に出た。東西を結ぶ街道沿いの村々には、巡業先で病を得たり災難にあたりで逗留を余儀なくされる役者もおり、その地に台本や演出を残し、それが地芝居に残ることもあった。一方、都市の芝居に魅了される村人もあり、東西の役者の弟子となって本格的な修行をするものも現れた。幕藩体制が崩壊して明治になると、自由な芝居興行ができるようになり旅芝居はますます盛んとなった。地芝居も禁令から開放されたので、何処でも神社の境内に舞台が造られ、祭礼には夜を徹して歌舞伎が上演された。ところが、役者鑑札制度が制定され、税を払って役者鑑札を受けた者しか舞台に立てなくなった。それで、村の芝居好きが専業役者の弟子になり、役者鑑札を受けて地芝居の中心となり、この者はその一方で師匠の一座の旅巡業にも加わる半プロ役者となった。

三河・遠州・東濃地域で幕末から明治・大正・昭和初期にかけて活発に活動した「万人講」は、こうした地芝居出身者の集団であった。専業役者と師弟関係を持ち、名を貰い、その芸系を継承した大師匠と呼ばれた者たちが、他の者たちを指導して、農閑期には一座を組織して近郷を廻ったり、旅芝居一座に加わって巡業する者もあった。地芝居では指導者として活躍した。愛知県豊田市の小原・旭・藤岡地区は「万人講」の拠点だった地で、

小原歌舞伎と旭町歌舞伎に今も「万人講」芝居が継承されているが、「万人講」の経験者はもう残っていない。5系統あったと言われる芸系も詳細は明らかではない。東三河の「万人講」も雄踏歌舞伎(静岡県浜松市)、金沢歌舞伎(愛知県豊川市)に継承されているが、同様である。豊田市郷土資料館や各地域の郷土館に収集された「万人講」師匠の旧蔵台本が少し残っている。「万人講」の浄瑠璃方であった竹本辰美太夫旧蔵本は、全て浄瑠璃床本で、役者一座に加わって巡業した足跡が克明に書き込まれている。小原郷土館所蔵台本群は、松本梅昇・松本梅笑らの旧蔵台本と旧築平村の地芝居台本であるが、これらはいずれも浄瑠璃と台詞でト書きのない台本である。これらの台本は「万人講」の芸系や各村の地芝居との関わりを伝えている。「万人講」の台本類は未だ収集も整理も不十分で、実態の解明はこれからである。

「万人講」のみならず、明治以降の地芝居は旅役者、特に地方に拠点を置く地役者と深い関わりを持った。旅芝居は、東西芝居の新しい演目を取り込んだり、独自の演目を仕組んだり、伝統的な演目も観客を睨んで独自の改作や演出を工夫していた。地役者はこうした演目を旅に同座して学んで帰ったり、旅巡業で知り合った役者を振付師匠に招致して、これを地芝居に移した。太平洋戦争後、映画さらにはTVの発達などによって、昭和30年代初めに旅芝居が壊滅状況になり、旅役者は郷里に帰ったり、地芝居の盛んな地に住み付いて「振付」を業とするようになった。現在の地芝居には、この旅芝居役者の伝えた芝居が多く行われている。

岐阜県中津川市のひがしみのふれあいセンターに寄託されている台本の旧蔵者、市川栄三郎(高島家)とその子市川秀鶴、市川源童などは地役者の典型であった。地芝居を主導する一方、一座を組んで地元や近隣の劇場を巡った。かれらは明治以降の大芝居台本を写したものの、中小芝居・旅芝居の台本を収集し、それを元にして上演用の台本を作っていたようである。

愛知県丹羽郡扶桑町で養蚕業の傍ら、旅芝居を行った中村七賀十郎は、上方役者中村嘉七(七賀助)の弟子で、独立後は名古屋周辺在住する役者仲間を組織して、主に中部一円を巡業していた。七賀十郎が所蔵した台本類は主に上方の台帳の写しで、これを元に上演台本を作っていたらしい。

岐阜県各務原市歴史資料館には名古屋を拠点に活躍した旅役者市川百十郎の旧蔵台本がある。百十郎は地芝居に誘発されて役者となり、引退後、生地各務原で近郷の地芝居と関わった。名古屋で中山喜楽の弟子となり、後に市川八百蔵と師弟関係を結んだが、独立後は自ら脚本を書き、連鎖劇を取り入れ

た独自の芝居を行って人気を博したので、大芝居の台帳や台本の写しもあるが、百十郎が自ら書いた上演台本、一座の役者や浄瑠璃方に渡すために写した台詞抜書本、床本も多い。旅役者・地役者の旧蔵台本群は、いずれも大量で、何時でも何処でも観客の嗜好に対応できるように、多彩な台本類を収集していたことが窺われる。

本研究では、収集に時間がかかり詳細な分析まではできなかったが、これらの台本を分析することで、地方役者の実態、旅芝居の有り様が明らかに出来ると思う。また、振付師匠として地芝居を指導するようになってからは、こうした台本の中から、素人役者であった作品を選んで、指導したり、容貌に合わせて振付たりしたので、これらと現行の地芝居を比較することで、両者の関係も明らかにできると思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

- ① 安田徳子、伊那谷下條村の歌舞伎上演に関する進出資料をめぐって一天保期の地方歌舞伎の一樣相一、岐阜聖徳学園大学国語国文学、査読無、32号、2013、25-36
- ② 安田徳子、第四章芸能第一節古典芸能三歌舞伎及び第四節民俗芸能三地芝居、愛知県史資料編35近代12文化、査読無、2012、649-670及び757-773
- ③ 安田徳子、『嬬山姥』研究一歌舞伎上演を中心に一、名古屋芸能文化、名古屋芸能文化、査読有、22号、2012、88-95
- ④ 安田徳子、下川路村若連旧蔵上方歌舞伎台帳、岐阜聖徳学園大学国語国文学、査読無、31号、2012、85-98
- ⑤ 安田徳子、幕末明治の名古屋芝居と地役者の活動、岐阜聖徳学園大学国語国文学、査読無、30号 2011、59-75
- ⑥ 安田徳子、地芝居における義太夫の重み、日本歌謡研究、査読有、50号、2010、1-12
- ⑦ 安田徳子、名古屋城下の芝居、名古屋市中区誌、査読無、2010、324-335
- ⑧ 安田徳子、「けいせい黄金鱈」あれこれ、名古屋芸能文化、査読有、20号、2010、103-108

[学会発表](計2件)

- ① 安田徳子、On Jishibai or Rural Kabuki, Kabuki : Negotiating Historical, Geographical, and Cultural Borders、2010年11月13日、アメリカ合衆国ハワイ大学マノア校(UHM)

- ② 安田徳子、大芝居・小芝居と地芝居—義太夫の重み—、2010年度日本歌謡学会春季大会 2010年5月15日 南山大学

〔図書〕(計2件)

- ① 安田徳子、私家版、地芝居残存台本調査による歌舞伎作品変遷史研究(研究課題番号2252027)成果報告書、2013、106p.
② 調査報告書作成委員会(安田文吉、小栗幸江、城井智子、安田徳子、山口清文)、社団法人全日本郷土芸能協会、平成23年度文化庁「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業「全国の地芝居と農村舞台」調査報告書、2012、245p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安田 徳子 (YASUDA NORIKO)
岐阜聖徳学園大学・教育学部・教授
研究者番号：00135279

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし